『賺蒯通』雜劇の構造について

小松　謙
京都大學

一

演劇は往々にして既存の物語をその素材とする。古くは誰もが知る神話を題材としたギリシア悲劇から、近くは現代の時代劇に至るまで、その種の作品は、完全に作者の創作になるものを、數において遙かに凌駕するであろう。この傾向は中國の演劇において最も顯著に看取される。既に田中謙二博士が詳細に論じておられるように、[1]中國演劇史上最高の達成とされる元雜劇[2]の大半は、その題材を前代の故事に負うものであった。これは雜劇がその本質において俗文學であったことに由來するものであろう。

元雜劇の受容者は、あくまで大衆をその中心としていた。それゆえにそのストーリーも、大半が大衆に親しまれていた講釋・諸宮調といった大衆演藝に由來するものであった。雜劇はそうした諸演藝の複合體とも呼ぶべき一面を持つと見なすことができよう。一般的に、大衆の興味の中心は、如何なる物語が上演されるかにではなく、周知の物語が如何に上演されるかにあるものである。彼等は、既に熟知している物語が如何に脚色されて演じられるかを固唾を呑んで見守り、喝采の瞬間を準備しつつ待ちうけるのである。二度目以降の上演の際には、こうした傾向がより一層甚しいものとなることは言うまでもあるまい。劇中の著名な一段のみをぬき出して上演するという風習も、ここから生じてきたものであろう。これは必ずしも中國においてのみ見出される現象ではない。古今東西を問わず、大衆演劇は皆、多かれ少なかれこうした傾向を持っている。日本における「忠臣藏」物語の受容の仕方などは、その典型的な例といえよう。

こうした傾向は、所謂「無名氏」の作の大半を占めるであろう俳優・書會の作に、最もはっきりとした形で現われていると言えるのではなかろうか。曲辭の創作には必ずし

も高い能力を持つとは言い難かった彼らは、觀客心理に最も通曉した劇場人としての本能的な構成力により、その缺點をカバーせざるをえなかった。そして事實、俳優・無名氏の雜劇には、劇場にあってはじめてその效果を發揮したであろう舞臺效果への志向が、おぼろげにではあるが見出されるのである。吉川幸次郎博士が『元雜劇研究』において指摘しておられるように(3)、劇の途中で正末・正旦が交替する作品の大半が俳優・無名氏の作であることは、そうした志向の一つの現われといえよう。これは、作者が劇全體を通して一人の主役で押し通すだけの力に缺けていたことを示すものというよりは、むしろ主役の交替によって何らかの舞臺效果を求めんがためのものと見た方が、正確なのではなかろうか。主役が途中で交替する雜劇の中、作者名が判明している作品の大半が、鄭廷玉・尙仲賢ら、結構に優れる筈の本色派の手になるものであることは、その一傍證といえよう。

また俳優・無名氏の作は、その題材においても甚だ特徵的なものを持っている。彼等の作品にはほとんど戀愛劇は無く、その大半は歷史劇と公案物（裁判劇）である。これは、戀愛劇が比較的變化に乏しく、多く曲辭の妙によって觀客の喝采を得るのに對し、歷史劇・公案物の類は、結構や舞臺效果――例えば立ち回り――によって觀客を惹きつけることが出來たからであろう。その素材は、當然既成の講史（歷史物講釋）や、公案物の說話（講釋）によって廣く知られたものであり、その意味では、觀客の如何に芝居に仕組まれるかという好奇心をかきたてるには、充分だった筈である。ここでは講史系雜劇の代表的作品である『賺蒯通』を中心に、無名の作者達が追及したものとは何だったのかを、素材との關わりや舞臺效果の面から、考えてみたい。

二

講史系の雜劇は、『元曲選』に收錄されていない作品の、極めて多くの部分を占める。黃丕烈の『也是園藏書古今雜劇目錄』には、「〇〇故事」として六十七種の無名氏の手になる講史系雜劇が記錄されており、內五十六種は現存す

る。これ以外にも、「諸名家」・「元人無名氏」の項に各々かなりの數の歴史劇が錄されており、すべてを加えれば、現存する雜劇全體の1/3にも達しよう。これは、『元曲選』において歴史劇が占めている割合からは、考えられない分量である。つまり、この種の作品には、臧晉叔の目から見て——雅とは認められないものが多かったのであろう。このことは、この種の作品がレーゼ・ドラマとしては面白味に缺ける、また曲辭の面から見れば取るべきものの少ない、上演效果を主としたものであったことを意味するものではなかろうか。事實、現存する歴史劇の大半は、元來明の宮廷内に藏されていた上演用臺本である内府本によるものであって、廣く一般に讀まれていたとは思えないのである。

このように舞臺の上においてはじめて生きるものである以上、この種の作品について考える場合、絶對にレーゼ・ドラマとして扱ってはなるまい。觀客の大半は、既に諸種の演藝を通じて、この種の雜劇にとりあげられた物語を熟知していた筈である。とすれば、作者の眼目とすべき點は——曲辭創作の能力が優れぬ以上——ただ一つ、如何にしてそのストーリーを舞臺に上せるか、であろう。しかも、講史の系列に屬する雜劇の場合、ストーリーに勝手な改變を加える餘地が少ない以上、他の演藝との關わりも、その他の素材に基いた雜劇以上に密接なものだったに違いない。

この種の雜劇の下敷きとなったであろう講史系講釋の種本、即ち平話の中、現存するものとしては、元の至治年間の刊本といわれる『全相平話五種』、即ち㈠『武王伐紂平話』、㈡『樂毅圖齊平話』、㈢『秦併六國平話』、㈣『續前漢書平話』、㈤『三國志平話』、及び成立年代不詳の㈥『五代史平話』の六種が現存する。この中㈠と㈢を除く四種にはいずれも内容的に重複する雜劇が現存するが、中でも平話ととりわけ深い近似性を示すのは、㈡、正確には『全相平話樂毅圖齊後七國春秋』の前半と同じ内容を扱っている『後七國樂毅圖齊雜劇』と、㈣、正確には『全相平話前漢書續集』の一部と同じ内容を扱った『隨何智賺風魔蒯通雜劇』[4]の二種である（傍點部は簡名、以後は原則として雜劇名は簡名で記載する）。

しかしながら、この兩者の平話に對する關わり方には、大きな差異が認められる。『樂毅圖齊』の場合、その題名自體が『全相平話樂毅圖齊後七國春秋』に基いていることからも明らかなように、平話と雜劇との間の關係は極めて密接である。そのプロットは、全篇すべて、ほとんど平話卷中のそれと同じであり、特に第一折・第二折においては、白自體も平話の表現をそのまま用いている部分が極めて多い。しかもその近似性は、人物の自己紹介やここまでの事件の經過説明といった定型的な部分に認められるだけではなく、第二折の孫子が燕の公子に反間の計を施す場面などは、平話の同じ場面を、ほとんどそのまま寫してきたものといっても過言ではあるまい。しかもそうした場面には正末は登場せず、當然曲も唱われない。つまり『樂毅圖齊』の場合、平話をそのまま雜劇に置き換えようとした結果、正末の登場しない、白のみからなる場が異常に長くなり、平話から借りられてきた白は、曲をひきだすうえで何の役割も果たさなくなっているのである。逆に正末が唱う場面でも、そこで唱う必然性が何ら感じられないことが多い。つまり白と曲辭が有機的に關わりあっているとは言い難いのである。こうした、本來曲を中心とした歌劇である雜劇の本質を裏切るような點が多く見出されることは、この作品が明代に入ってから成立したと考えられる(5)脱膊雜劇（劍劇）であることによるものであろう。この劇の觀客にとってこの雜劇は、演技つき・立ち回りつき・歌つきの講釋のようなものだったに違いない。いうまでもなく、これは雜劇としては大きく本質から外れた行き方である。しかし講史系雜劇には、むしろこの系列に屬する作品の方が多いように思われる。

以上のように、『樂毅圖齊』は平話を直線的に雜劇へと置き換えただけのものである。しかるに『賺蒯通』の場合はこれとは全く異なり、平話はより複雜な形で、より巧妙に利用されているのである。以下『賺蒯通』の構造について、細かく檢討してみたい。

三

『隨何智賺風魔蒯通雜劇』(『隨何智もて風魔蒯通を賺す』、

略稱『賺蒯通』）は、『元曲選』にも收錄されているため、比較的廣く知られており、過去の研究においても何度か問題にされている。ここでは、そうした先人の研究にふれつつ、この雜劇の內容を分析していくこととしよう。

この雜劇には二種類のテキストが現存する。一つは臧懋循、字は晉叔の校になる『元曲選』本であり、今一つは所謂脈望館鈔本に含まれる、趙琦美抄の內府本である。この二種のテキストの間には、題名自體が違うことをも含めて、かなりの異同が認められる。

第一折と第二折には、細々とほぼ全般に渉って異同があるが、本質的なものではない。第三折では、最初の蕭何と隨何の對話における白の部分と、最後に四曲續けて唱われる曲の部分とに若干の異同が認められるが、前半の曲にはほとんど異同がない。兩テキストの差は第四折において最も甚しく、全般に渉って隨處に重要な異同が見出される。特に結びの部分は、二つのテキストの間で全くといってよいほど異なっている。

この兩者の關係は、孫楷第氏が『也是園古今雜劇考』で述べておられるように、內府本系のテキストに臧晉叔が手を入れて、『元曲選』本をつくりあげたものと思われる。この雜劇の場合、後に述べるように、特に第四折の白において、その形跡は最も濃厚に見出される。ここでは、まずより原型に近いと思われる脈望館鈔本を對象として論議を進め、『元曲選』本については、最後にまとめて言及することとしたい。

以上の前提のもとに、まずこの雜劇の粗筋を述べてみよう。（ ）內は脚色名、〔 〕內は『元曲選』本の內容を示す。

第一折――蕭何（沖末）が登場。韓信の軍權があまりにも大きく、除かねばならぬといい、樊噲（淨）と張良（正末）を呼んで相談する。張良は韓信の功績の大なることを述べ、蕭何に反對するが、聽き入れられず、韓信でさえ殺されるのではわが身も危いと唱い、山に入って修行すると言い殘して去る。蕭何と樊噲は、天子が雲夢に行幸すると僞って、韓信を誘殺することに決める。

第二折――韓信（外）が登場。天子が雲夢に行幸されるにつき、京師に入って留守するよう命じられたがどうした

ものか、蒯文通を呼んで相談しようという。蒯徹、字は文通(6)（正末）が呼ばれて登場。彼は韓信を引き止め、張良・范蠡にならって、引退して山に入るように勸めるが、聽き入れられない。そこで紙錢と水飯を供えて韓信のために祭をしてみせ、なおも引き止める。だがやはり聽き入れられず、蒯徹はあきらめて去り、韓信は都へと出發する。

第三折――蕭何登場。韓信は既に誅殺したが、蒯徹の事が氣になる。蒯徹は發狂したというが、眞僞が定かでないゆえ、智惠者の隨何を派遣して眞僞の程を確かめさせ、もし僞りであれば蒯徹をだまして連れて來させようと言う。隨何（外）登場、任をうけて退く。場面變わって蒯徹の鄕里。子役（倅兒）登場、氣違いを見に行こうという。蒯徹、狂氣のさまにて登場。婚禮の眞似事をはじめるが、子供達に馬鹿にされるので、怒ってこれを追い出し、羊小屋に入ってしまう。そこで韓信の死を悲しんでいるところに隨何登場。まことの狂氣とは見えぬと呟きつつ立聞きする。蒯徹が悲歌を唱うのを聞いて、隨何はついにその佯狂を見破り、姿を現わして、都に來るように言う。蒯徹はこれに對し、様々に恨みの歌を唱って退場。隨何も彼を連れていかねばと言いつつ退場。

第四折――蕭何・樊噲登場。隨何が蒯徹の佯狂を見破って連れてきたと言うところに、曹參（外）・王陵（外）登場。一同揃ったところで、まず隨何、ついで蒯徹を呼び出す。蒯徹は入ってくるなり、据えてあった熱湯のたぎるかまに飛び込もうとする。蕭何が止めて、譯を訊ねると、蒯徹は、自らその罪を知ったのだと言い、韓信に反逆を勸めたことを認め、しかしそれも韓信のみを知っていて、漢の天子を知らなかったためだと言う《この部分は『史記』に見える蒯通の辯舌とほぼ同じ內容であり、劇の狀況とは矛盾している》。續いて更に、徹は張良・韓信の功績を述べたて、韓信が自分の忠告に從わなかったことを殘念がる。ついで、信には十の罪が有ると言ってその十の功績を數え上げ、三反〔三愚〕ありと言って三たび叛逆の好機があったにもかかわらず謀叛しなかったことを述べ、自ら禍いを招いたのだと歎ずるので、蕭何らは悲しみつつその無實を認め、名譽回復をしようとする。〔しかし蒯徹は、そんなことをし

て今更何になると嘲笑する。」そこへ殿頭官〔黄門〕（外）が登場。韓信の封爵を返し、墓をたてて祭ること、蒯徹の罪を許し、官位と金を與えることを傳え、一同とともに皇帝の德を稱えて終わる。〔しかし蒯徹は、そんなものはいらぬと言って突っ返すが、蕭何は一方的に違勅は許さぬと言い、詞を述べて終わる。〕

右のように、第四折には、二種のテキストの間で大きな違いがある。

この雜劇については、過去に青木正兒博士と王季思氏が言及しておられる。兩氏の說は、この雜劇の重要な問題點にかかわるもののように思えるので、次に簡單にふれてみたい。

青木博士は、その著書『元人雜劇序說』(7)で、この劇のことにふれておられる。まずその成立年代については、

「太和正音譜」に著錄せる『古今無名氏雜劇一百十一本』と其題名の合する作は大抵元人の作と推定して差支えないと思ふ。何となれば正音譜には『古今無名氏』と稱して有るが、其の『國朝三十三本』の條に『內無名氏三本』と註し、而して國朝（即ち明初）の知名の作を丁度三十記錄して居る。そして其次に『古今無名氏雜劇』を列擧して居る。……故に余は此三本を除きて外は「正音譜」の編者が元人作と認めて居たものと解釋する。

そして『賺蒯通』は『正音譜』の「古今無名氏」に含まれているのである。恐らくこの結論は妥當であろう（ただし『也是園書目』にあって、なぜかこの劇が他の「古今無名氏」中の雜劇とは異なり、「元人無名氏」の項に入れられず、「西漢故事」に含まれていること、第四折で平話では高祖の演じる役を蕭何が演じている點(5)（參照）などに、若干の不安が殘されているようにも思われる）。

更にその內容については、次のように言っておられる。

「史記」淮陰侯列傳もしくは「漢書」蒯徹傳に本づき敷衍したものである。結構は直線的で「馬陵道」に比すれば變化に乏しく、第一折に張良が蕭何等と合はず飄然として山中に修行し去ることを演じて居る如きは、筋の統一を妨げて居る。然し曲辭は悲慨激越で「馬陵道」より生々して居る。……

確かに第一折のみ正末が張良であることは、結構という點からみると、大きな缺陷であるかのように思われる。しかし、はたして作者は何の意味も無く、このような不統一を犯したのであろうか。ここに一つの問題が存しよう。

一方、王季思氏は『玉輪軒曲論』所收の『翠葉庵讀曲瑣記』[8]の中で、次のように述べておられる。

元人の無名氏雜劇の中では、『貨郎旦』『賺蒯通』が雙璧と言えるであろう。前者は民間傳唱の作と思われるが、後者は文人學士でなければ書きえないものである。……（第四折の蒯通の辯舌と、最後の數曲をひいて）……忠臣義士が超然として生死の外にあり、危きに臨んで身命をなげうち、血涙と談笑とをともどもになすさまを描いて、まことに元劇の生んだ最高の一典型であり、作者の人品がただちに伺われる。その姓名が詳かでないのは、きっと身の上に言葉に表わし難い痛みがあり、人に知られたくなかったので、この劇を借りてそれを發したものであろう。

しかしながら、この說はその立脚點に根本的な誤りがあり、從うことはできないものである。卽ち、後に詳しく述べるように、王氏が凡手でないとしておられる第四折における蒯徹の長ゼリフは、ほとんど全く『前漢書平話續集』から引き寫してきたものであり、今一つあげておられる最後の數曲は、脈望館鈔本には全く見えず、或いは臧晉叔によって增補されたのではないかと考えられる部分である。從って作者が「文人學士」である必要は全く認められないのである。

四

以上述べてきた點を前提とした上で、平話との比較に移りたい。『賺蒯通』は、『樂毅圖齊』とは異なり、平話と雜劇とでプロットにかなりの差異が認められる。平話が『史記』の記述をほぼ忠實に踏襲しているのに對し、雜劇は必ずしもそうではない。その相違點を次に列擧してみよう。

(1)　第二折における蒯徹の韓信に對する忠告は、現存する平話の中には無い。恐らく『前漢書續集』たるこの平話の前篇――『前漢書正集』にあたる平話の中で、『史記』

における蒯徹の謀叛教唆と同時期、項羽・劉邦・韓信の三者が鼎立する形となった時なされていたものと思われる。またその内容も、恐らくは獨立すること、即ち高祖に對して叛逆することを勸めたものだったであろう。

(2) 平話では、韓信が殺されるのは高祖が雲夢に行幸した時のことではなく、その時は淮陰侯に降格されるのみであって、その後、今度は本當に叛逆して誅殺される。ただし韓信が王の資格[9]で、何の罪もないのに捕えられたのは、雲夢行幸の際――ただし京師においてではなく、雲夢において――のことである。つまりここでは、二つの事件が一つにまとめられているのである。

(3) 正名にもなっている肝腎の隨何が蒯徹を「賺す」手段が全く異なる。平話では蒯徹はこのときまだ韓信の死を知らず、隨何は彼にその事實を傳えて相手の反應を觀察することにより、その佯狂を見破るのである。

(4) 第一折の張良辭朝のことは、平話では三王、即ち韓信・彭越・英布がすべて誅されて後のことである。

このように、『賺蒯通』の第一折～第三折は、平話と同じ事件を扱っていながら、その内容は全くといってよい程異なる。しかしながら第四折を仔細に檢討するとき、この雜劇も平話と深い關係を持ち、しかも平話より遲れて――恐らくは平話を下敷きとして成立したものであると考えざるをえないのである。

その第四折の白と、平話卷中の該當部分とは、後掲の資料の比較からもわかる樣に、明らかに一方が他方に基いて書かれたものである。兩者の間で大きな差といえるのは、蒯徹が韓信の「十罪」を列擧する部分だけであるが、この部分も平話の内容が非常に繁雜で、舞臺で用いるには向かぬため、他の箇所（例えば資料にも引用した卷上の部分）にある、比較的簡潔な形のものを流用したのであろう。しかも兩者の先後關係を決定すべき要素が、資料の傍線部における平話と雜劇の相違の中に見出されるのである。

この部分は、平話では次のようになっている。

陛下に申し上げまする、韓信は罪あるのみにあらず、その上に五反がございます。それがし申し上げまするゆえ、信の反のこと、とくとご覽下さいませ。燕を收め楚

を破り、四十萬の大軍の兵權を握っておりました。この時こそ反すべかりしに、今ただの人となっておりましたこと、これぞ反でございます。韓信は九里山前にて大合戰をいたしました折、その兵權の下には百萬の大軍がおりました。……これぞ二反でございます。近來天下は靜まり、信に楚王の位を授け、四十萬の兵印をあずけられました。獨角殿にすわって「孤」と稱し、「寡」と言い、冠をいただいて圭をとる身分……これぞ三反でございます。陛下が城皐よりお出ましになられた折、信は修武にあって五十名の大將、四十萬の大軍の兵印をあずかり、大將には主を振わすの威あり、天下の諸侯はおそれたものでございます。今日それでもそれがしをかまゆでにしようとなさる。……

右のように、冒頭では「有五反」といいながら、文中では三反までしかあげず、傍點を付した箇所で「四反」を言い出すかと見えて、その部分に締めくくりをつけずに、そのまま話が他方面に行ってしまう。これは最初の「五反」が誤りというよりは、何らかの文脈の混亂乃至は脱落があったものとみるべきであろう。一方、脈望館鈔本では、「五反」が「三反」に直され、數の上では不自然を解消してはいるものの、四つ目を言い出すかのような奇妙な文脈は、正されてはいない。しかも平話における「三反」の內容――楚王であった時に謀叛せずに、徒手空拳の今となって謀叛する――は、實は明らかに雜劇の內容とは矛盾しているのである。雜劇においては、韓信は齊王の地位にあって殺されたのであり、楚王になったことは無く、まして「今爲閑人――今ただの人となる」などという狀況は全くありえない。この平話の「三反」をも、脈望館鈔本はそのまま受け入れているのである。これは、脈望館鈔本がそのまま平話に據ったため起こった矛盾と思われる。『元曲選』本において、臧晉叔はこうした部分すべてに手直しを加えている。卽ち、「三反」の內容をすべて削り去って「三愚」には「二反」の內容をあて、「四反」にあたる筈だったと思われる城皐云々の部分を「二愚」にあて、三つの「愚」を正しく年代順に並べ變えて、すべての矛盾を解決しているのである[10]（詳しくは資料を參照）。この三者の異同から見て、

平話→脈望館鈔本→『元曲選』本の順に、後者が前者に依據してつくられていったことは明白であろう。

さて、このように雜劇の白が平話と同じであることは、いかなる效果をもたらすものであろうか。この場合、觀客は正末が舞臺の上で講釋師の名調子と同じものを演じるところを見ることになる。つまりここでは、『貨郎旦』の第四折において「貨郎兒」を導入して特殊な效果を上げている場合と類似した、別種の演藝を導入することによる一定の效果が期待されるのではなかろうか。ただし、この部分がすべて白によっている以上、原則として曲をその中心とする歌劇である雜劇においては、その效果は『貨郎旦』において「貨郎兒」を曲に乘せて演じてのけた場合に比較すると、遙かに弱いものとならざるをえないであろう。

五

以上見てきたように、『賺蒯通』の第四折は、平話に基いて成立したものと考えられる。では平話からやや離れた性格を持つ他の三折は、如何なる性格を有するのであろうか。この問題を解く鍵は、第一折のみ正末が張良であるという、一見奇異な構造の中にあるように思われる。

先にもふれたように、青木正兒博士は、第一折のみ張良辭朝の事を扱っているのは、筋の統一を妨げている、と批判しておられる。はたしてこの批判は妥當なものといえるであろうか。まずこの張良辭朝說話の性格について考えてみたい。

張良が仙人になることを志していたのは、正史にも見える通りである。しかしそこには仙道を志したが果たさなかったとあるのみで、辭朝入山のことは勿論、死後仙人になったとも記されてはいない。しかしながら、彼が仙人になったという傳說は、かなり古くから流布しているのである。このことは、或いは五斗米道の創始者にして、後代の道教信者に深く尊崇され續けた張道陵が、張良の子孫と稱されていたことによるものかもしれない。『太平廣記』卷一の第六、神仙の六に引く『仙傳拾遺』には、張良は死後仙人になったという。ただしここにも辭朝入山のことは見えず、張良辭朝傳說の發生は詳かでない。ただこの傳說は、元代

には非常に流行していたもののようである。隋樹森の『全元散曲』を通見するに、張良辭朝の事を扱った散曲は十七種の多きにのぼり、その大半は彼を范蠡と並べ、時としては屈原と對比させて、ある種の理想像として描いているのである。このように榮位からの辭官隱遁を好んで題材とするのは元代散曲に一般的に見られる風潮であり、或いは元という時代の特異性によるものであろうか。ともあれこの傳說は元人には極めて愛好されたものとみえ、散曲に頻出するのみならず、王仲文によって『張良辭朝』[11]なる雜劇にも仕組まれている（この雜劇は既に佚して、『北詞廣正譜』にその一曲を殘しているのみである）。

張良辭朝のことは、先にもふれたように全相平話にも見えるが、その時期は『賺蒯通』とは異なり、三王誅殺の後に置かれている。時期を變更してまで、この傳說を採り入れたのはなぜであろうか。

ここで注目すべきは、『清平山堂話本』に收められている『張子房慕道記』の存在であろう。これは二十五首の七言詩と一首の詞を、文言的な地の文でつないだ、一種の唱い物であり、胡士瑩氏は詩話の形式を現代に傳えるもの――ただし明代の擬作――とし、[12]入矢義高氏は「道情」に近いものか、「陶眞」の一種であろうと推定しておられる。[13]その成立年代を限定すべき要素は、目下のところ見出すことはできない。ただ『張子房慕道記』の中で、張良が漢の朝廷を去るにあたって自宅に書き殘す詩と、平話において同じ場面で張良が高祖に告げる詩とがほとんど同じものである[14]點から考えると、この唱い物の成立は意外に古いものなのかもしれない。少なくとも、この唱い物が俗間に行なわれていた演藝に直接由來するものであることは、確かであろうと思われる。

さて、『賺蒯通』第一折の張良が唱う曲、及び第二折の蒯徹が唱う曲と、『張子房慕道記』とを比較してみると、全く同じ文句こそ見出されないが、兩者の間には以下のような共通性が認められる。

1　兩者ともに――『賺蒯通』第一折の張良の場合は言うまでもなく、第二折の蒯徹までも――辭官隱遁のことを唱っている。

2　特定の用語について、類似點が認められる。『賺蒯通』第二折の「朝天子」で蒯徹は次のように唱う。

……我想那雍齒合誅、丁么無罪。漢蕭何忒下的、救他出井底、到將他斬訖。……

思えばかの雍齒は誅すべく、丁么は罪無かりしを。漢の蕭何はあまりにむごく、彼の者をば井戸の底より救い出しながら、彼の者をば斬り訖りぬ。

一方、『慕道記』には次のような詩が見える。

……　……
高祖咬牙封雍齒　高祖は牙を咬んで雍齒を封じ
漢王滴淚斬丁么　漢王は淚を滴れて丁么を斬りぬ
蕭何穩坐爲丞相　蕭何は穩坐しながら丞相となり
韓信安邦命不牢　韓信は邦を安んじながら命牢からず
……　……

兩者ともに雍齒・丁么という、この場には無關係の人名を引き合いに出し、しかも丁公を丁么とするという、俗文學(15)全般に共通する誤りを犯している。更に『賺蒯通』の同じ第二折には、次のような部分がある。

……〔正末云〕元帥、不如學范蠡張良埋名隱跡、到落箇遠害全身也。……〔正末云〕元帥說差了也。你豈不知這兩箇人。〔韓信云〕那兩箇人。〔正末唱〕

〔么篇〕一箇仁者樂山、一箇智者樂水……

……〔正末〕元帥樣。范蠡・張良にならって、名を埋め跡を隱して、遠害全身の計をおたてなさいませ……〔正末〕元帥樣のお言葉は間違っております。この二人をご存知ない筈はありますまい。〔韓信〕どの二人だ？〔正末唱う〕〔么篇〕一人は山を樂しむ仁者、一人は水を樂しむ智者……

ここで張良と范蠡を引き合いに出しているわけだが、理窟で考えると、この時點で蒯徹が張良辭朝のことを知っている筈はないのである。一方、『張子房慕道記』の最後の部分では次のような詩が唱われる。

張良交印與高皇　張良は印を交して高皇に與え
范蠡歸湖別越王　范蠡は湖に歸りて越王と別る
二人不嫌官職小　二人官職の小さきを嫌うにあらず
只怕江山不久長　只江山の久長ならざるを怕るればな

り

またその前の詩にも、

范蠡歸湖脫紫襤　　范蠡は湖に歸りて紫襤を脫し
子房脩道不回還　　子房は道を修めて回還せず

という句がある。先にもふれたように、張良と范蠡を對として理想的人物と考えることは、元代散曲に一般的に見られる現象であるが、『賺蒯通』のこの場面のような、如何にも不自然な部分で用いられていることには、何らかの理由があるのではなかろうか。

以上のように、『賺蒯通』第一折の張良の白及び曲の一部と、第二折における蒯徹のそれとは、張良辭朝說話を扱った俗文學、卽ち『張子房慕道記』乃至はその前身である唱い物――または王仲文の『張良辭朝』雜劇とも考え得よう――をその根底としていると見なしうるのではなかろうか。このように考えてみると、第一折のみ張良が平話の筋をも無視して現われること、第二折において蒯徹が唐突に隱遁を勸め、しかもその內容が、張良を引き合いに出すなど多くの矛盾を含んでいることをも說明することが可能なのである。第一折・第二折では正末（恐らく四折を通じて同じ役者が演じたものであろう）は、『張子房慕道記』における張良の役をも演じていく。第二折では彼は蒯徹であるが、同時に觀客の目から見れば張良でもある。こうして第一折と第二折は、正末の交替を伴うにもかかわらず、スムーズにつながるのである。このように考えていくと、第一折のみ正末が異なるということは、決して「筋の統一を妨げる」ものではなく、むしろ二つの非常に對照的な、深く大衆に親しまれていたストーリーを同時に進行させることにより、特別な效果を上げることができるものではなかろうか。

六

以上述べてきた假說が正しいとすれば、この劇の前半は、韓信の死の物語を進めると同時に、張良辭朝のことをも演ずるという性格を持つことになる。いわば『貨郎旦』におけると同樣の效果を、この場は持つとみることもできよう。では最後に殘った第三折は、どのような意味を持つのであ

ろうか。

ここでこの雜劇の正名を思い出してみたい。『隨何智賺風魔蒯通』――隨何智もて風魔蒯通を賺す、である。一般に雜劇の正名とは、かなりの例外はあるものの、劇場の入口に掲げるという性質上、觀客の注目を最も引き付ける場――つまりその劇のクライマックスを示すものだった筈である。この劇のクライマックスは、現在讀んでみた限りでは第四折にあるかのように思われる。しかし當時の觀客にとっては、必ずしもそうではなかったのではなかろうか。あの蒯徹の長廣舌は講釋の引き寫しであり、しかもあくまでも白、それもほとんど動きを伴わない白である。雜劇は歌劇である。例えば西歐の古典オペラで、レチタティーボばかりの部分と、アリアを含む部分とでは、どちらがより重要といえようか。たとえ如何に緊迫した場面であろうと、アリアを含まぬ場面は單なる場つなぎに過ぎないのが普通である。これと同様、曲が中心をなす雜劇においては、こうした白のみからなる場面は、脱膊雜劇における立ち回りの場面を除いては、中心とはなりえないであろう。レーゼ・ドラマとしてとらえた場合、あたかもクライマックスであるかのように思われる『賺蒯通』の第四折も例外ではあるまい。この劇の中心は、正名の示すように第三折にあると見るべきではなかろうか。

現在の第三折を見ると、他の三折に比べて『元曲選』本と脈望館鈔本との異同が驚くほど少ない。特に前半の數曲――蒯徹が狂氣を裝う場面――において、その傾向には特に著しいものがある。このことは、或いはこの劇の中、この部分が明代に入っても一折上演の對象とされていたことを示すものではなかろうか。こうした佯狂の場は、例えば『馬陵道』の第三折――青木正兒博士は、この場面と『賺蒯通』第三折との間には密接な關係があるのではないかと述べておられる――が「孫詐」と題して、民國當時編纂された崑曲の曲譜の總集である『集成曲譜』になおも收められている點からみても、當時甚だ愛好されていたものと考えることができよう。一般に歌劇においては、こうした「狂亂の場」は、ドラマ性を損うことなく多くの歌辭を挿入するに好適の條件として、しばしば用いられる。例えば

十九世紀初頭、イタリア・オペラの主流であったベル・カント・オペラにおいては、長大な狂亂の場が、ドラマを損うことなく充分に歌手の技術を發揮させる具として、しばしば用いられた。有名なドニゼッティの『ルチア』の「狂亂の場」はその典型的な例である。また日本の能においても、「狂女物」の名を以て總括される、狂亂の場を含む一連の戲曲群がある。こうした場においては、「カケリ」「クルヒ」と呼ばれる、狂氣を示す特殊な舞が舞われることになる。世阿彌は『拾玉得花』でこれを次のように說明している。

物狂ひになぞらへて、舞をまひ、歌をうたひて狂言すれば、もとよりみやびたる女姿に、花を散らし、色香を施す見風（ケンブウ）、これまた何よりも面白き風姿なり。(16)

ここでも狂亂は一種の手段であった。さて、「ベル・カント（美しい歌）・オペラ」に劣らず歌唱が重要な意味を持つ雜劇である『賺蒯通』や『馬陵道』においても、事情は同じであろう。『賺蒯通』の第三折も、『馬陵道』の第三折と同樣、明代後期に至っても一折上演の對象とされ、なお頻繁に上演されていたとすれば、この折――特に狂亂の場――に兩テキスト間の異同が少ないことも納得できる。そして、その人氣を呼んだのは、狂亂の場という設定の卓越性だったのではなかろうか。

この部分の面白味は、今殘されている脚本を讀むだけでは判然としない。一折の長さも短く、白が非常に少ない。その一方で曲の數は、決して少なくはないのである（第一折が八曲、第二折が九曲、第三折は九曲、第四折が六曲）。恐らくこの場の興味の中心は、曲の面白味と、曲の內容から察するに狂氣のしぐさのおかしみとにあったものであろう。しかも演ずる役者が張良・蒯徹といったインテリ役を得意とする俳優であったとすれば、その面白味はより一層增幅されよう。ただ、今となっては、前者については意味の不明瞭な點も多く、後者については當然確かなところを知る手段もないため、その眞の面白味を知ることはほとんど不可能である。

ともあれこの劇は、二重構造を有する第一折・第二折と、講談を演じる場である第四折とを、クライマックスであり、

唯一全く作者の創造にかかる場面と考えられる第三折でつないだ構成を持ち、一見「直線的で變化に乏しい」かのように見えながら、實は甚だ曲折に富んでいると言うことができよう。

七

『賺蒯通』雜劇は以上の通り、當時の俗間演藝にその基礎を置いた、極めて劇場效果に富んだ構造を有する。しかし、先にも述べたように、この雜劇は平話に基きながらも、第四折以外の場面においては、あまりにも多くの平話との相違點を持つ。これは何故か。實はそこに作者の深い配慮が見出されるように思われるのである。

平話と雜劇の相違點は、さきに四條にわたって提示した通りである。この中、(3)の隨何が蒯徹を賺す手段が異なることは、第三折が唯一の作者の獨創になる部分であること、更に言えば、雜劇の方が、より憤激という、曲を唱うに適した狀況設定を容易に導き出すことができるような內容を必要とすることによるものであろう。また、(4)の張良辭朝の時期が異なることは、この雜劇の中にそのプロットを强引にでも持ち込むためには、當然の處置といえよう。では前二者——(1)の蒯徹の忠告の時期と內容が平話と雜劇では全く異なること、(2)の韓信の二段階に涉る破滅が一度にまとめられていることは、何故に必要となったのであろうか。

韓信の破滅について、二つ（嚴密にいえば、齊王から楚王への移封も含めて三つとなるが、その際のシチュエーションは雜劇には導入されていない）の事件を一つにまとめたのは、一つには四折という限られたスペース內で物語を處理せねばならぬという、演劇化の過程における措置なることはいうまでもないが、今一つの重要な働きをも有している。卽ち、韓信を完全に潔白の身とすることである。もし史實や平話と同樣に、韓信の死が淮陰侯として陳稀と結んで叛逆を圖ったことによるものだとすれば、この時韓信は、高祖・呂后によって追い詰められたすえのこととはいえ、確かに謀叛したのであり、完全に潔白の身とはいいえない。しかるに作者はここで韓信を潔白のままで——つまり平話・『史記』における最初の失脚の時の狀況で——殺

す。高祖を信じ切って蒯徹の忠告を聽こうともせぬその無邪氣とさえいえるような盲目さは、觀客の同情を強く引くと同時に、蕭何に代表される封建勢力の理不盡さを浮彫にし、第四折における蒯徹の激語を極めて效果的なものとするであろう。

蒯徹の忠告の內容が、叛逆教唆から隱遁の勸めに變えられ、その時期が韓信が殺される直前に移されていることも、隱遁を勸めることによって張良の物語をこの雜劇に導入すると同時に、右に述べた傾向を助長する働きをも有するであろう。蒯徹が叛逆を勸めるのであれば、觀客の同情はやはり損われる。しかし彼は單に平和的な隱遁を勸めただけであり、その彼をも捕える蕭何らの不法な遣り口は、觀客の憤りを誘わずにはいないであろう。しかもその忠告の時期は、元來ずっと以前であったものが、韓信の死の直前に移されている。これは言うまでもなく、構成を緊密にするためには必然の措置ではあるが、一方これゆえに蒯徹の韓信に對する痛惜の念が、より身近なものとして觀客にも感じとれるであろう。第四折における蒯徹の怒りも、曲によってストレートに感情が表現されているだけに、平話におけるそれとは比べものにならない程激しいものとなっている。そもそもこの場面における蒯徹の辯舌は、『史記』淮陰侯列傳においては、自らの身を守るだけのものであり、彼は韓信のことを「孺子――小僧」と呼んで憚らない。これに對し、平話におけるその辯舌は、韓信辯護の言葉を中心に据え、『史記』の表現をそのまま利用した部分でも、「孺子」という言い方を「此人」と改めている。しかしながら、その言葉はなお自らを守ることを主としたものであり、事實彼はこの後授けられた官職と金を有難く頂戴し、韓信の部下達による復讐を妨害するのである。これが雜劇になると、蒯徹の辯舌の主眼は、彼の感情の表白たる曲からも明らかなように、韓信の辯護に向けられているのである。

こうした傾向は『元曲選』本においては、恐らくは臧晉叔の手によって、更に推し進められている。第四折に二つのテキストの間で大きな異同があるのは先にもふれた通りであるが、そのほとんどが、この雜劇をより急進的なものへと變える働きを持っている。まず、脈望館鈔本において

殿頭官（外）が登場する際、皇帝を代辯して言う白、

不想蕭何暗暗定計斬了韓信……

あにはからんや、蕭何がこっそりはかりごとをめぐらして、韓信を斬ってしまおうとは……

が、『元曲選』本では、

因蕭何暗地設計斬了韓信

として、「不想」の二字が取り去られている。つまり脈望館鈔本にあっては潔白な聖域に置かれていた皇帝が、ここでは表面にひきずり出されているのである。更に、『元曲選』本では脈望館鈔本にはなかった「沽美酒」「太平令」「鴛鴦煞」の三曲が付け加えられているが、その中で蒯徹の反抗が極めて激越な形で示されている。例えば、最後の「鴛鴦煞」で、彼は黄金と官位を與えるという詔勅に對してこう唱う。

……〔還冠帶科唱〕這冠帶呵添不得我榮光。〔還黄金科唱〕這金呵鑄不得他黄金像。只要你個蕭丞相自去思量、怎生的屈殺了什大功臣被萬民講。

……〔冠帶を返すしぐさにて〕この冠帶とて、私に榮光を添えることはできませぬ。〔黄金を返すしぐさにて〕この黄金とて、あの方に黄金像を鑄てさしあげることはかないませぬ。蕭丞相様に考えていただきたく、などて大功臣を罪無くして殺したか、萬民に論じさせたいばかり。

こうして蕭何に反省を迫るのに對して、何が違勅は許さぬと一方的にこれを壓殺する形で、『元曲選』本はおわっている。このように、極めて尖鋭な形で權力の横暴——ひいては封建勢力全體を告發するという行き方は、『元曲選』において往々にして示されているものであり、これは明代後期の文藝思潮ともかかわる問題であろう。(17)

八

以上見てきたように、元明の間に行なわれた無名氏による雜劇は、當時の民間演藝と極めて密接な關係を有する。それゆえにこの兩者を切り離して考えることは不可能であり、兩者を一體として考えることにより、はじめてこの種の雜劇の正しい理解も可能となろう。しかも、その際、こ

の種の雜劇が、舞臺上で――當時の觀客の眼前で――演じられることを前提としてつくられた、生きた舞臺藝術であったことを忘れてはなるまい。それゆえ、今日的な觀點から見て甚だ面白味に缺けると考えられる作品も、當時の觀客からすれば、極めて興趣に富んだ作品であったということも、往々にしてありうるであろう。元雜劇のテキストは一般に激しい搖れを示すが、そのこと自體が、本來雜劇が絕えず變動しつづける、生きた舞臺藝術であったことを示すものではなかろうか。各テキスト間の對照、他の俗文藝との比較により、作者の意圖を正しく理解し、元雜劇の舞臺藝術としての本來の姿を解明していくことが、今後の課題となろう。

注

(1) 田中謙二「元雜劇の題材」(『東方學報京都』十三册四分)

(2) 以下の文中で用いる「元雜劇」「雜劇」という言葉の示す範圍は、必ずしも元代の作に限らず、明代の作をも含めて、四つの套數からなることを原則とする「雜劇」という文學ジャンル全體を覆うものとする。

(3) 吉川幸次郎『元雜劇研究』(岩波書店　一九四八)三一三頁。

(4) 脈望館鈔本ではこの劇の正名は『隨何賺風魔蒯徹』であるが、ここでは混亂を避けるため『賺蒯通』に統一する。

(5) 『樂毅圖齊』が明代の作であると推定される根據としては、平話において燕の昭王が演じている役割を、第二折において「燕公子」なる名すら與えられていない人物が演じていることがあげられる。『大明律』卷二六、刑律九、雜犯や、顧起元の『客座贅語』卷十、國初榜文の項に見えるように、明初、駕頭雜劇(帝王が登場する雜劇)は嚴禁されていた。このことについては、岩城秀夫『明の宮廷と演劇』(『中國文學報』一、及び『中國戲曲演劇研究』(創文社、一九七三)所收)に詳しい。

(6) 蒯徹は『史記』淮陰侯列傳においては蒯通とされているが、これはその名が漢の武帝の諱にふれることによるものであって、徹が本來の名である(『漢書』本傳)。俗文學の世界では、彼は蒯徹、字は文通とされ、蒯文通の省略形として、しばしば蒯通という名が用いられる。

(7) 青木正兒『元人雜劇序說』(弘文堂　一九三七)第六章「中期末期の無名氏傑作」(五)「元の無名氏傑作」一六二頁。

(8) 王季思『玉輪軒曲論』(中華書局　一九八〇)附錄、「翠葉庵讀曲瑣記」《賺蒯通》三六七頁。

(9) 『史記』淮陰侯列傳によると、韓信は齊王からまず楚王に

移され、ついで楚王として雲夢で捕えられて淮陰侯に格下げされ、最後に陳豨と結んで叛逆をはかり、露見して呂后に殺される。この雑劇では齊王としていきなり殺されるのであり、形の上では三段階が一つにまとめられている。

(10) 臧晋叔はこの改變の過程において、「一愚」の部分で、もと「收燕破楚」とあったものを「收燕趙破三齊」と書き改めているように、『史記』に基いて若干手を加えているようである。

(11) この雑劇の正名は、賈本『錄鬼簿』では『從赤松張良辭朝』簡名『張良辭朝』に、曹楝亭本『錄鬼簿』には『漢張良辭朝歸山』に、『太和正音譜』は『張良辭朝』につくる。

(12) 胡士瑩『話本小説概論』(中華書局 一九八〇) 第六章「話本的名稱」第五節「話本與詩話」一六九頁。

(13) 中國古典文學大系25、『宋・元・明通俗小説選』(平凡社 一九七〇) 解説五四一頁。

(14) 『張子房慕道記』の辭朝の詩は次の通り。傍點部が平話の詩と異なる部分。

懶把兵書再展開　兵書をば再び展開するに懶く
我王無事斬良才　わが王は事無くして良才を斬りぬ
腰間金印無心掛　腰間の金印は掛くる心なく
拂袖白雲歸去來　袖を拂って白雲に歸りなん
兩手撥開名利鎖　兩手もて撥し開く名利の鎖
一身踊出是非街　一身踊り出す是非の街

『謙刪通』雑劇の構造について (小松)

不是微臣歸山早　微臣山に歸ること早きにあらず
怕死韓信劍下災　韓信の劍下の災いに死するを怕るればなり

これに對して平話の辭朝の詩は次のようなものである。

懶把兵書再展開
我王無事斬良才
腰間金印無心戀
拂袖白雲去不來
兩手撥開名利路
一身跳出是非垓
老臣若不歸山去
怕似韓彭劍下災

僅かな差が、口誦により傳えられたことを示すもののように思われる。

(15) 古今小品書籍印行會影印の內閣文庫本による。文學古籍刊行社の影印本は「丁公」につくるが、前後の韻からみて「丁么」であることは明らかである。

(16) 日本古典文學大系65、『歌論・能樂論集』(岩波書店 一九六一) 四六五頁による。

(17) 金文京「小説「李娃傳」の劇化——「曲江池」と「繡襦記」——」(『中國文學報』32) にこの點に關して詳しい言及がある。

資　料

上段は『賺蒯通』雜劇の『元曲選』本、中段は『賺蒯徹』雜劇の內府本（脈望館鈔本）のそれぞれ第四折、蒯徹が辯舌をふるう場面。下段は『全相平話前漢書續集』（または『全相續漢書平話——呂后斬韓信——』）。中段と下段に付した傍點は、兩者が全く同じ表現を用いている箇所。中段・下段は『元曲選』本の相當箇所に記載。中段・下段の空白部は上段との長さの相違によって生じたものであって、省略ではない。省略部分は點線で示す。なお傍線部は、本文中に引用した部分。

（樊噲云）此人不可問。他若問呵必然要下說詞也。

（樊噲云）此人不可問。他若問呵必然下說詞也。（正末云）自知蒯徹之罪。豈望生命也。

陳平搔耳、此人不可問。若問通必然說也。

（正末云）自知蒯徹有罪。豈望生乎。

（蕭何云）當初韓信是你教唆他來。

（蕭相云）當初韓信是你教唆他來。

（正末云）是蒯徹教唆他來。（蕭相云）現有漢天子在上、你不肯輔佐、倒去順那韓信。

（正末云）是蒯徹來。（蕭何云）見有漢主、你不輔助、到順韓信。

（正末云）丞相。你豈不知桀犬吠堯、堯非不仁。犬固吠非其主也。當那一日我蒯徹則知有韓信、不知有什麼漢天子。吾受韓信衣食。豈不要知恩報恩乎。……

（正末云）住住住。丞相。你豈不知桀犬吠堯、堯非不仁。則識其主不識其君。蒯文通則知韓信非知漢主。吾受韓信衣祿、豈不知恩也。……

（蕭相云）想當初主公起兵漢中、多虧了衆位功臣力也。不專靠那韓信一人之力也。

（蕭何云）想當初主公起兵于漢中、多虧衆位功臣也。

（正末云）我想楚漢爭鋒、鴻溝爲界。那時節俺韓元帥投楚則楚勝、投漢則漢勝、天下之勢決于一人。我因此屢屢勸韓元帥留下項王決個鼎足三分之

（正末云）想山東大亂皆因秦王無道。各處興兵、漢主平定天下、吾教韓信反數次、不納吾之言、致令他身遭白刃、可惜屈死此人。

（傑）犬吠堯、堯非不仁。吠之爲非其主也。當知小臣獨知韓信非知陛下、吾受信衣祿、豈不知恩。

山東大亂皆因秦皇無道。到處興兵、謀臣不聖明輔佐。臣宜盡呈絕論之才、教信反數次、不納小臣之言、致必它家受刃。故以哀哉可惜。……

計、怎當他不信忠言、致令身遭白刃、致死了蓋世英雄。豈不可惜。

丞相只你當初也曾保舉他來。成也是你、敗也是你。我蒯徹做不得反面的人。惟有一死可報韓元帥于地下。(做跳科)(蕭相云)令人。且與他擋住者。

(樊噲云)蒯文通。韓信說是你搬調他來、你正是個通同謀反的人。當得認罪。

(蕭相云)樊將軍。你說的是。想他在韓信手下爲辯士、正是他心腹之人。律法有云、一人造反、九族全誅。何況他是通同謀反的。今日便將他油鍋烹了、也不爲枉。

(正末云)丞相。我想漢王在南鄭之時、雄兵驍將莫知其數。然沒一個能敵項王者。後來得了韓信、築起三丈高臺、拜他爲帥、殺得項王不渡烏江自刎而死。如今天下太平。更要韓信做什麼。斬便斬了、不爲妨害。且韓信負着十罪。丞相可也得知麼。

(樊噲云)你說屈殺了韓信、可又有十罪。休說十罪、則一樁罪過也就該死無葬身之地。

丞相。當初是你保他來。吾今願求一死、正當其理。

(樊噲云)蒯文通。韓信說是你搬調他來。你何當認你的罪。

(蕭相云)將軍正是這等說。想你在韓信手下爲辯士、你是他心腹之人。你豈不知韓信。他不可久握兵權。理合得罪。今已斬首示衆。

(正末云)丞相說的是也。想漢主百萬雄兵驍將莫知其數、皆不及項羽。漢主拜韓信爲帥、滅項羽在烏江。如今天下太平、更要韓信(做什麼。可以斬之。)韓信更有十罪。丞相。聽蒯徹說韓信十罪咱。陛下百萬雄之驍將莫知其數、皆揔不及於項羽、立韓信爲帥、滅項羽在烏江。如今天下太平、更要韓信則甚。是可亦斬之。臣所信更有十罪。漢大臣皆可以聽通所信十罪。

(樊噲云)你說屈殺了韓信、可又有十罪。休說十罪、則一庄罪過無葬身之地。

（蕭相云）蒯文通。既是韓信有十罪、你對着這衆臣宰根前說一遍咱。

（正末云）一不合明修棧道暗度陳倉。二不合擊殺章邯等三秦王取了關中之地。三不合涉西河虜魏王豹。四不合渡井陘殺陳餘并趙王歇。五不合擒夏悅斬張仝。六不合襲破齊歷下軍擊走田横。七不合夜堰淮河斬周蘭龍且二大將。八不合廣武山小會垓。九不合九里山十面埋伏。十不合追項王陰陵道上逼他烏江自刎。這的便是韓信十罪。

（蕭何云）蒯徹。韓信有十罪、對着這衆臣宰根前你說。

（正末云）一不合明修棧道。二不合暗度陳倉。三不合涉西河。四不合虜魏豹。五不合擒夏悅。六不合斬張仝。七不合夜堰淮河。八不合弔灯斬龍且。九不合廣武山小會垓。十不合九里山大會垓、逼霸王烏江自刎。這的是此人十罪。

第一陛下漢中投奔諸國亦可拜將能定秦。陛下復有故地。是可殺也。是一罪。……

（卷下、六、明修棧道暗度陳倉。赫燕收趙涉西河。虜魏豹擒夏悅。斬章邯赶州横於海島。逼霸王到江（……）

（蕭相歎介云）此十件乃是韓信之功。怎麼倒是罪來。

（正末云）丞相。韓信不只十罪更有三愚。（蕭相云）又有那三愚。（正末云）韓信收燕趙破三齊、有精兵四十萬、恁時不反如今乃反。是一愚也。漢王駕出城皐、韓信在修武統大將二百餘員雄兵八十萬。恁時不反如今乃反。是二愚。韓信九里山前大會垓、兵權百萬皆歸掌握。恁時不反如今乃反。是三愚也。韓信負着十罪、更有此三愚。豈不自取出禍。今日油烹蒯徹、正

（蕭何背云）此十件乃是韓信之功也。

（正末云）丞相。韓信則不十罪更有三反。（蕭何云）又有那三反。（正末云）收燕破楚兵權四十萬。恁時好反今爲閑人。乃是一反也。韓信九里山前大會垓、權一百萬大兵。恁時好反今爲閑人。乃二反也。啓陛下今來天下已加信爲楚王、權兵印四十萬。恁時好反今爲閑人。乃是三反也。漢王駕出成皐、韓信在修武、權兵印五十員大將掌四十萬大軍、有振主之威。

啓陛下韓信則不有罪更有五反。臣啓我王詳察信之反者。收燕破楚兵權四十萬雄兵。此時好反今爲閑人。乃是反也。韓信九重山前大會垓下、權一百萬大軍。恁時好反今爲閑人。乃二反也。啓陛下今來天下已加信爲楚王、權兵印四十萬。坐獨角殿稱孤道寡頂冠執圭。恁時不反今爲閑人。乃是三反也。陛下駕出城皐、信在修武、權兵印五十員大將掌四十萬雄兵。帥有鎮

所謂兎死狐悲、芝焚蕙喚。請丞相自思之。（蕭相同衆悲科）（樊噲云）這一會兒連我也傷感起來了。（正末唱）……

（外扮黃門引校尉捧冠帶黃金上云）小宮黃門是也。因蕭何暗地設計斬了韓信、又要將蒯徹烹入九鼎油鑊、聖人已知、着小官赦免蒯徹之罪。……

（黃門云）您衆位將軍俱望闕跪者。聽聖人的命。〔詔云〕朕提三尺起豐沛、不五年間盡取諸侯王、追殺項羽、奄有天下。此非一人之能、皆韓信之力也。朕以謬聽人言、將爲叛逆、遂令未央鍾室冤血尚存。朕實愍焉。茲特還其封爵、令有司立墓祭祀。蒯徹本以口舌從事、與武涉同時。爲主其心、吠堯何罪。甘赴鼎鑊、視死如飴。誠壯士也。可免其死。仍授京兆一官、黃金千兩。……

〔譯〕

（樊噲）この者に問うてはなりませぬ。問えば必ず言葉を吐こうと致しましょう。（正末）自ら蒯徹に罪あることを知ったので

天下諸侯、悚怕。韓信斬了已罷。今日油烹蒯徹。正是狐兎絶滅、不同鳧。丞相思之。（蕭何同衆悲科）（樊噲云）這一會兒連我也傷感起來了。……

（外扮殿頭官領祗候上云）小官殿頭官是也。不想蕭何暗暗定計斬了韓信、又要將蒯徹烹入九鼎油鑊。聖人已知、着小官赦蒯徹之命。……

（殿頭官云）住者。你衆位將軍聽聖人的命。爲韓信立十件大功屈斬於市曹、聖人今悔與韓信勅建祠堂墓頂封官春秋祭祀。蒯文通賜勅下免罪賜金千兩絹帛一千匹、交通還鄉侍奉老母。通又哭奏高皇、我王可憐韓信丐死、看舊日君臣之面、可亦建墓高築靈室、蓋一祠堂受人祭祀。高皇依奏勅葬墳墓建立祠堂。通受燕京通判、謝恩辭帝歸鄉……

主之威、天下諸侯懼怕。今日尤烹小臣。我王見孤兎滅絶。不用獵。欲要烹臣、通仰天而叫屈。高皇見通言信有大功勞、無言可答。兩眼泪淚、衆大臣皆傷感。

金千兩絹帛一千疋、加爲京兆通判、着他衣錦還鄉侍奉老母。今日箇龍虎風雲做箇賀喜的筵宴。你聽者。……

（樊噲）この者に問うてはなりませぬ。問えば必ず言葉を吐きましょう。（正末）自ら蒯徹の罪を知ったのです。なんで命の助

陳平が耳打ちして申します。「この者に問うてはなりませぬ。もし問うたなら、通め、必ずや口をききましょう。……」

す。なんで生きることを望みましょう。（蕭相）そもそものはじめ、韓信には、お前が唆したのだな。

（正末）蒯徹がある男を唆したのです。

（蕭相）現に漢の天子が上にいますに、お前は天子を輔佐しようともせず、逆にあの韓信に順うとは。

（正末）丞相様、ご存知でしょう。桀の犬が堯に吠えついたとて、堯が不仁だというわけではありませぬ。犬は元來自分の主人でない者に吠えかることを望みましょう。（蕭何）そもそものはじめ、韓信には、お前が唆したのだな。

（正末）蒯徹のやったことです。

（蕭何）現に漢主がおられるに、お前は佐けようともせず、逆に韓信に順うとは。

（正末）あいや、お待ちを。丞相様、ご存知でしょう。桀の犬が堯に吠えついたとて、堯が不仁であるわけではありませぬ。ただその主人だけをつくのです。あの蒯徹、韓信だけを知っていて、漢の天子など存じませんでした。私は韓信の衣食を受けた身、恩を知って恩に報いずにおられましょうや。……

（蕭相）思えばそのかみ、殿が兵を漢中にて起こされたは、多く諸諸の功臣等に負うていること、韓信一人の力によるものではないわ。

（正末）思いまするに、そのかみ、楚漢がしのぎをけずり、鴻溝をば境

「桀の犬が堯に吠えついたとて、堯が不仁であるわけではありませぬ。吠えつくのは（堯知っていて、その主君を知らぬのです。蒯文通は、韓信だけを知っていて、漢主のことは知りませんでした。私は韓信の衣祿を受けた身、なんで恩を知らずにおられましょうや。……

（蕭何）思えばそのかみ、殿が兵を漢中にて起こされたは、多く諸諸の功臣等に負うていることじゃ。

（正末）思いまするに、山東が大いに亂れましたのは、すべて秦王の無道が）その主人ではないからです。それがしが韓信だけを知っていて陛下を存じあげなかったこと、おわかりいただける筈です。私は信の衣祿を受けた身、なんで恩を知らずにおれましょうや。……

山東が大いに亂れましたのは、すべて秦皇の無道によるもの。いたると

界といたしました。あの折、われらが韓元帥が、楚に投ずれば楚が勝ち、漢に投ずれば漢が勝つこととなったでしょう。天下の形勢はこの一人にかかっていたのです。私はそれゆえに何度も韓元帥に、項王を殘しておいて、鼎足三分の計を定めるように勸めましたが、いかんせん、あの方は忠告を信じようとはなさらず、身は白刃をうけることになり、世を蓋うばかりの英雄を殺すことになってしまいました。まことによるもの。各處で兵がおこりましたが、（結局）漢主が天下を平定なさいました。私は何度も韓信を叛逆させようと致しましたが、（信は）私の言葉を聞き入れようとされず、その身は白刃をうけることとなってしまいました。あたら無實の罪でこの人を殺してしまったのです。

ころで兵がおこりましたが、それがしは陛下を輔佐していたものではございませぬ。それがしは當然のこととして、言語に絶する方の限りを發揮して、信を何度も叛逆させようと致しましたが、（信は）それがしの言葉を聽き入れようとされず、必然的に刃を身にうけることとなりました。これゆえにまこと哀しく、惜しまれます。

とに惜しいことです。

丞相様、そもそものはじめ、あなたがあの方を推擧なさったのではありませぬか。成したのもあなたなら、敗ったのもあなた。この蒯通は、裏切者にはなれませぬ。ただ一死をもって、地下の韓元帥にお報いするばかりです。（かまに跳り込もうとするしぐさ）（蕭相）これ、誰か、ともあれ引きとめい。

（樊噲）蒯文通、韓信は、お前が自分を唆したのだと言っていたぞ。お

丞相様、そもそものはじめ、あなたがあの方を推擧なさったのではありませぬか。私は今となっては、一死を求めて、理を正さんとするばかりです。

（樊噲）蒯文通。韓信は、お前が自分を唆したのだと言っていたぞ。お

前はまさしく謀叛の共謀者、罪を認めぬわけにはいくまい。

（蕭何）將軍どののごもっともなお言葉だ。思えば貴様が韓信の配下にあって辯士として仕えていた時には、信の腹心だったではないか。韓信を知らぬとは言わせぬぞ。あの男は、長い間兵權を握っていてはいけなかったのだ。罪を得たのも當然のこと、もはや首を斬ってさらしたわ。

（蕭相）樊將軍、あなたのおっしゃる通りだ。思えばこやつが韓信の配下にあって辯士として仕えていた時には、まさに韓信の腹心だったではないか。律法にも、「一人が造反すれば、九族に至るまですべて誅される」とある。ましてこやつは謀叛の共謀者だ。今日ただちにかまゆでにしたとて、不當ではあるまい。

（正末）丞相様、前も自分の罪を認めぬわけにはいくまい。

（正末）丞相様の私思いまするに、漢王南鄭にいませし折、雄兵驍將數知れずおりましたに、一人として項王に對抗しうる者はおりませんでした。その後韓信を得て、三丈の高臺を築き、大將に任命してはじめて、項王を、烏江を渡らぬうちに自刎して死なせることができたのです。今は天下太平、この上韓信に何の用がありましょう。斬ってもかまいますまい。韓信にはその上、十の罪があります。丞相様、劃徹が韓信の十の罪を擧げるのをお聽き下さい。

おっしゃる通りです。思えば漢主は百萬の雄兵をそなえ、驍將は數知れずおりましたに、皆項羽には及びませんでした。漢主が韓信を大將に任命なさってはじめて、項羽を烏江に滅すことができたのです。今は天下太平、この上韓信に何の用がありましょう。斬ってしまってもかまいますまい。韓信にはその上、十の罪があります。漢の大臣の方々、皆様通が思うところの信の十の罪をお聽き下さい。

陛下は百萬の雄之（？）をそなえ、驍將は數知れずおりましたが、ことごとく皆項羽には及びませんでした。韓信を立てて大將としてはじめて、項羽を烏江に滅すことができたのです。今は天下太平、この上韓信に何の用がありましょう。斬ってしまってもかまわぬ人間です。私思いまするに、信には更に十の罪があります。漢の大臣の方々、皆様通が思うところの信の十の罪をお聽き下さい。

おりました。丞相様、おわかりになりますか。

（樊噲）お前は、韓信は無實の罪で殺されたと言いながら、なんと更に十の罪が有るというのか。十も罪があれば言うまでもないこと、たった一つの罪があるだけでも、死んで身を葬る地とてないこととなったとて當然だろうが。

（蕭相）劇文通。韓信に十の罪があるというのなら、ここにいる大臣達の目の前で、言ってみるがよい。

（正末）第一に、不届きにも棧道を修理するとみせて、そのうらで密かに陳倉より兵を出せしこと。第二に、不届きにも章邯等三秦王を擊殺して、關中の地を取りしこと。第三に、不届きにも西河を渡り、魏王豹をとりことせしこと。第四に、不届きにも夏悅を捕えしこと。第五に、不届きにも張仝を斬りしこと。第六に、不届きにも灯を吊って龍且を斬りしこと。第九に、不届きにも廣武山にて小合戰させしこと。第十に、中におられた時、諸國に投じたとてやはり將に任ぜられて秦を定めることができたであろうに、（そうすることなく、それゆえに）陛下はまた舊領を回復されました。（この部分、意味が不明瞭）殺してもかまいません。罪の第一です。……

（樊噲）お前は、韓信は無實の罪で殺されたと言いながら、なんと更に十の罪が有るというのか。十も罪があれば言うまでもないこと、たった一つの罪があるだけでも、死んで身を葬る地とてないこととなったとて當然だろうが。

（蕭何）劇徹。韓信に十の罪があると言うのなら、ここにいる大臣達の目の前で、言うがよい。

（正末）第一に、第一に、陛下が漢

に、不屈きにも夜淮河をふさいで周蘭・龍且の二大將を斬りしこと。第八に、不屈きにも廣武山にて小合戰せしこと。第九に、不屈きにも九里山に十面埋伏の陣をしきしこと。第十に、不屈きにも項王を陰陵道上に追い、烏江に追いつめて、自刎せしめしこと。これぞ韓信の十の罪でございます。

（蕭相、歎くしぐさにて）この十の事こそは、韓信の功績ではないか。なんで罪だというのか。

不屈きにも九里山にて大合戰し、覇王を追いつめ、烏江にて自刎せしめしこと。これがこの人の十の罪です。

（蕭何、傍白）この十の事こそは韓信の功績ではないか。

を海島に追い、覇王を追い詰めて烏江まで行った。……）

（正末）丞相様。韓信には十の罪あるのみならず、その上に三つの愚がございました。

（蕭相）その上どういう三つの愚があるというのだ。

（正末）韓信は燕趙を收め三齊を破り、精兵四十萬を擁しておりましたが、その時謀叛せず、今頃になって謀叛しました。一つめの愚でございます。漢王が、城皐よりお出ましになった折、韓信は修武にて大將二百餘名、雄兵八十餘萬を統べておりました。その時謀叛

（正末）丞相様。韓信には十の罪あるのみならず、その上に三つの反がございました。

（蕭何）どういう三つの反があるというのだ。

（正末）燕を收め楚を破り、四十萬の兵權を握っておりました。この時こそ反すべかりしに、今ただの人となっておりましたこと、これぞ一反でございます。韓信は九里山前にて大合戰をいたしました折、その兵權の下には百萬の大軍がおりました。この時こそ反すべ

陛下に申し上げまする、韓信は罪あるのみにあらず、その上に五反がございます。それがし申し上げまするゆえ、信の反のこと、とくとご覽下さいませ。燕を收め楚を破り、四十萬の大軍の兵權を握っておりました。この時こそ反すべかしに今ただの人となっておりましたこと、これぞ反でございます。韓信は九重山前にて大合戰をいたしました折、その兵權の下には百萬の大軍がおりました。この時こそ反すべ

せず、今頃になって謀叛いたしました。二つめの愚でございます。韓信は、九里山前にて大合戦した折には、百萬の兵權はすべてその掌中に歸しておりました。その時謀叛せず、今頃になって謀叛いたしました。三つめの愚でございます。韓信は十の罪を負い、その上にこの三愚があったのです。自らわざわいを招いたものではありませぬか。今日は剮徹をかまゆでにされるのも、まさに世に言う、「兎死して狐悲しみ、芝焚かれて蕙（かおりぐさ）は嘆く」と申すもの。どうか丞相様、そこのところをよくお考え下さい。

かりしに、今ただの人となっておりましたこと、これぞ二反でございます。近來天下は靜まり、韓信に楚王の位を授け、四十萬の兵印をあずけられました。この時こそ反すべかりしに、今ただの人となっておりましたこと、これぞ三反でございます。漢王が城皐よりお出ましになった折、韓信は修武にあって五十名の大將、四十萬の大軍の兵印をあずかり、主を振わすの威あり、天下の諸侯はおそれたものでございます。韓信は斬ってしまいました。今日剮徹をかまゆでにしようというのは、まさに「狐兎絶滅せるは鼠に同じからず」と申すもの。丞相様、そこのところをお考え下さい。

かりしに、今ただの人となっておりましたこと、これぞ二反でございます。陛下に申し上げまするが、近來天下は靜まり、信に楚王の位を授け、四十萬の兵印をあずけられました。獨角殿にすわって「孤」と稱し、「寡」と言い、冠をいただいて圭をとる身分。この時反せず、今ただの人となっておりました。これぞ三反でございます。陛下が城皐よりお出ましになられた折、信は修武にあって五十名の大將、四十萬の大軍の兵印をあずかり、大將には主を振わすの威あり、天下の諸侯はおそれたものでございます。今日それでもそれがしをかまゆでにしようとなさる。王様、「孤兎絶滅すれば、獵を用いず」という言葉を思い出して下さい。なおも私をかまゆでにしようとなさるのなら、通（わたし）は天を仰いで無實を叫ぶばかりです。」高皇は通が信に大功あることを言うのを聞かれまして、答える言葉もございません。兩の眼より涙

（蕭相、人々とともに悲しむしぐさ）

（樊噲）このたびは、おれでさえ悲しみがわいてくるわ。

（正末、唱う）

……

（外、黄門に扮し、校尉を従え、冠帶・黄金を捧げて登場）わたくしは黄

（蕭何、人々とともに悲しむしぐさ）

（樊噲）このたびは、おれでさえ悲しみがわいてくるわ。……

……

（外、殿頭官に扮し、ともの者をつれて登場）わたくしは殿頭官です。

門です。蕭何がこっそりはかりごとを設けて韓信を斬り、その上蒯徹を九鼎の油がまに入れてかまゆでにしようとしておりますのを、みかどははやお知りになり、わたくしを蒯徹の罪を許しによこされました。

……

（黄門）將軍の方方、みな御所を望んでひざまずき、みかどの命を聞かれい。

（詔）朕三尺を提げて豐沛に起ち、五年間ならずしてことごとく諸侯王を取り、項羽を追

あにはからんや、蕭何がこっそりとはかりごとを定めて韓信を斬り、その上の上蒯徹を九鼎の油がまに入れてかまゆでにしようとしておろうとは。みかどははやお知りになり、わたくしに蒯徹の命を救わせられまする。

……

（殿頭官）靜まれい。將軍の方々、みかどの命をきかれい。韓信は十の大功をたてながら無實の罪で市場において斬られたがゆえに、みかどは今になって後悔され、韓信のためみ

はしとど、いならぶ大臣らも、ことごとく悲しみました。

殺して天下をあまねく有す。これ一人の能にあらず、皆韓信の力なり。朕あやまりて人の、將に叛逆をなさんとすと言えるを聽きしを以て、遂に未央の鍾室をして寃血尚存せしむ。朕實にこれを愍む。ここに特にその封爵を還し、有司をして墓を立て、祭祀せしむ。蒯徹はもとより口舌を以て事に從い、武涉と時を同じうす。主のためにせるその心、堯に吠うるも何の罪かあらん。甘じて鼎鑊に赴き、死を視ること飴の

ことのりを出して祠堂を建て、墳墓の上に官を封じ、春秋祭祀をさせられることとなった。蒯文通には、金千兩、絹帛一千疋を賜わり、京兆通判の職を下さり、錦をきて故郷に歸り、老母に仕えさせることとなされた。今日は龍虎の君臣風雲に會したことゆえ、祝いの宴をひらこう。聽くがよい。（以下、結びの詩を述べる。）

みことのりを下されて、罪を免じ、金千兩、絹帛一千匹をたまわって、通を故郷に返して老母に仕えさせることとなさいました。通は更に哭きながら高皇に奏上いたします。「王様、韓信が無實の罪で死んだことをお憐み下さい。昔の君臣の仲を思って、墓を建て靈室を高くつくり、祠堂をこしらえて人の祭祀を受けられるようして下さいませ。」高皇は奏上の通りにみことのりを出されて、墓に葬らせ、祠堂を建てさせます。

如し。誠に壯士なり。その死を免ずべし。なお京兆一官、黄金千兩を授け、……

通は燕京通判の官を受け、ご恩を謝してみかどと別れ故郷に歸ります。